

『抵抗の拠点から』を読む

表題と写真は、ジャーナリスト・青木理さんの講談社からの近著である。青木さんは共同通信社の社会部やソウル特派員などを経て、フリーになり多くの本を出版している。本書副題は、朝日新聞「慰安婦報道」の核心とあり、なかでも3章「全真相 朝日新聞『慰安婦報道』」を引きこまれるように読んだ。

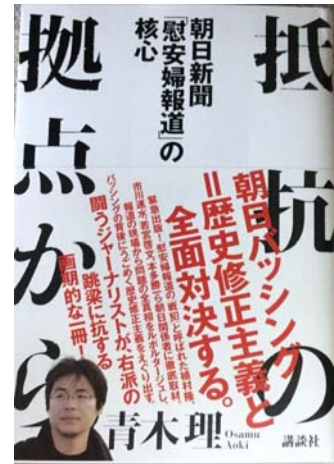
4人の朝日新聞関係者からのインタビューと青木さんのコメントが詳しく書かれている。4人というのは、「慰安婦報道」の火付け役と言われた元・記者の植村隆さん、元・主筆の若宮啓文さん、前・東京本社編集局長の市川速水さん、元・東京本社編集局長の外岡秀俊さんである。

植村さんについてはレポートしているが、植村さんに次ぐほどのバッシングの対象とされているのが若宮さんである。若宮さんが論説主幹の座にあった2005年の大型コラムで「竹島」のことを書いたことによるという。自身のことだけでなく、このたびの朝日バッシングの時代的意味と背景についての証言が興味深い。

市川さんは現役編集幹部の発言として注目される。慰安婦問題の「検証記事」だけでなく、原発事故の「吉田調書」記事についても内情が明かされる。公開された「吉田調書」問題についての青木さんの指摘を紹介したい。「人類史でも未曾有の原子力人災の恐怖と実相を浮き彫りにする一級の資料であった。なのにライバル社の報道は朝日記事を批判することに重点が置かれ、いまま収束しない巨大な原子力人災の本質論を語る材料とされることはほとんどなかった。これによって胸をなでおろしているのはいったい誰か。権力の監視こそがメディアとジャーナリズムの役割であると考えれば、この無惨な結末は日本のメディア界全体にとって歴史に残る大敗北と記録されるべきだろう。」まったく同感する指摘であり、こうした視点から新聞報道のチェックを続けたい。

さいごの外岡さんとの対話も示唆に富む。外岡さんの発言を2つだけ紹介したい。最近「寛容さというものがものすごく欠けてきて、言論の幅が非常にせまくなってきていると感じます。以前はもっと懐が深かったのに、レッテルを貼ったりバッシングしたり、ある標的をみつけてそれを叩くという、そういう傾向に流れつつある。」

「とにかく言論に一番大事なものは多様性ですよ。いくつもの言論機関があつて、多様性のある討論の場を保障する。もちろん主義主張が違ふのは当然ですが、多様性という部分ではお互いに重なりあう。ようするに議論というか、フォーラムというか、そういうものが成り立つことが前提なんです。なのに互いの陣営に分かれていがみあっていたら、読者としてはもううんざりということにならないか心配です。」



(2015年2月19日)